51

cinquenta e um

目　　　次

▼　連載第２回

　　眼鏡越しの空　　　　　　　　　　　　　－ 1－　しもこし

☆　テーマ競作『祭り』

松戸サイエンティスト　　　　　　　　　　－28－　霜越邦彦

祭礼　　　　　　　　　　　　　　　　　　－35－　砂塔悠希

日報　楽しいベニア塗りをして　　　　　　－41－　橋本さかえ

後の祭り？　　　　　　　　　　　　　　　－50－　白坂　匡

▼　不定期連載第６回

黒竜に騎る男　　　　　　　　　　　　　　－57－　砂塔悠希

▼　　連載第３回(最終回)

ＴＯＹ　　　　　　　　　　　　　　　　　－102－　K.Shimokoshi

◇　編集後記　　　　　　　　　　　　　　－140－

連載　第二回

眼鏡越しの空

しもこし

「ほら、気をつけて」
「うん」
（あ、眼鏡が、ずれた）
自転車の上、大石にしがみ付いている。手がふさがっている。なおせない。どうにもならない。困った。おっかなびっくり片手を放そうとするが、どうもバランスを

崩しそうで怖い。大石はそんな智美に気付いた。智美の方を見ながら片手を放し、その手で眼鏡のずれをなおしてくれた。

（感謝）

智美は大石にしがみ付きながら考えた。遠くからこの光景を見たら、大石ってやっぱり格好よく見えるんだろうな、と。本人もそう思っているだろうか。

自転車で走りながら、大石は下校中の一人の男子生徒に声をかけた。ハンドルから片手を放し、合図でもするように手をあげて見せ、そのまま通り過ぎた。

智美はその男子には見覚えがあった。大石と同じバスケ部の生徒だ。しがみついたまま彼の前を通り過ぎた・・・。ひょっとして端から見たら、

（わたしって、カノジョに見えるんじゃないの）そう思ったが、智美はすぐにバカバカしいと思いなおした。（んなわけないか。・・・どちらかと言えば、兄と妹が、いいところだ）

その後だった。あることに気付いた。

「あれ、ねえ、駅は向こうだよ」

最寄り駅とは別の方向へと進んでいた。

「え、ああ、家まで送るよ」

（なに）

智美の家までは二駅ある。もちろん二駅と言っても地方によって距離は違う。ここはそれほど距離があるわけではないが、かと言って短いというほどでもない。

「遠いよ」

しかし、大石は平然としていた。
「ああ、それなら大丈夫、気にしないで。ぼくん家、通り道だから、たいしたことないよ」
それを聞いて、智美は、そうなんだ、と思ったが、同時に、あれ、とも思った。しかし、その時はしがみついているのが精一杯で、何が、あれ、なのか、考える余裕がなかった。そして、いつしか、そんなことどうでもよくなってしまった。
しばらくして、大石の家に着いた。
見た感じ、ごく普通の家だった。
「ちょっと休憩。少し待ってて」
大石はそう言って玄関を開けて中へ入って行った。
少しして、ジーンズ姿に着替えた大石が出て来た。制

服以外の姿を見るのは初めてだ。少しドキドキする。そして、その後から何故か大石の母親が出てきた。
「ドキドキ」が一瞬で覚め「バクバク」になった。
大石は母親に対して、けむたそうな態度で言った。
「何で母さん出て来るの」
「えー、だって、コースケが女の子連れて来るなんて珍しいじゃない。母さんだって見たいもん」
それで困ったのは大石だけではない。智美の方がもっと困る。いきなり大石の母親に会うことになろうとは夢にも思わなかった。リアクションに困る。
「こ、こんにちは」
智美にはそれを言うのが精一杯だった。
大石の母親は大石と違い小柄だ。同年代の女性と比べ

ても背は低い方だろう。姿勢も大石のようにしゃんとしてるわけでもなかった。智美は大石の親を想像したことがあったわけではないが、なんとなくイメージと違う気がした。きっと大石は父親似なのだろうと思った。

「ごめん、驚くよね、気にしないで」

大石はそう言い、母親を家の中へ追いやろうとした。

「やーだ、お話するの」ニコニコしながら反抗している。何かだだっ子のような人だ。「お名前は何て言うの」

「あ、はい、木原です。木原智美です」

『キハラトモミ』ちゃん。・・・あらぁ、キが力だったら有名人と同名ねぇ」

「はぁ」(何か面白い人)

「コースケが迷惑かけたら、殴っていいから」

「え・・・『殴』・・・、いえ、・・・迷惑なんて、どちらかと言えばわたしの方が」（かけてる方なのです）

しかし、聞いていないのか、

「あ、殴るときはグーでいいからね」

マイペースな人だ。でも悪い人じゃない。

そんな調子で、しばらく話していた。その間、すっかり大石の母親のペースだった。

智美は、ふ、と彼女が左足をかばって立っていることに気付いた。それを言うと、

「ああ、さっきね、右足で左足を踏んじゃったの。ただ、それだけ。あたしってばかでしょう」

「右足で・・・、左足を・・・」

「母さんもういいだろう、行くから」と大石。

「あらぁ、そう。残念。また来てね」
「はい」
大石の母親は玄関の中へ入って行った。と、そこで悲鳴が聞こえてきた。何ごとかと思ったが、
「左足で右足を踏んじゃったわぁ。・・・あらぁ、これじゃあ、両足痛いわぁ」
姿は見えないが、玄関の方から聞こえてくる。
二人とも言葉を失い、顔を見合わせた。
「・・・」
「・・・」
「さぁ、行こうか」と大石。
「いいの」
「いい、付きあってられない」

走り出すと遠くに小犬が見えた。捨犬だろうか。前方の道路を横断している。
「ねぇ、あの犬どうしてる」
『あの犬』って」
「前、学校に捨てられてた犬」
智美はびっくりした。今、家で飼っている犬、ゴンのことだ。ゴンのことは倉下桃子くらいにしか話した覚えがない。そんなことを、わざわざ倉下が大石に話すとも思えない。不思議だ。
「何で知ってるの」
それは簡単なことだった。
「見てたから・・・」

（なるほど）
「・・・体育館から・・・・」
（気付かなかった）
「・・・バスケ部全員で・・・・」
（なに）
「・・・・一部始終」
（えっ・・・・）

一年程前のことだった。
その日は朝から雨だった。ゴンは学校に捨てられていた。正確に言うと学校の敷地内ではない。「そば」と言った方がよい。体育館裏のフェンスの外だ。ダンボールに入れられ捨てられていた。生後どのくらい経っているか

わからなかったが、よちよちで立って歩けるくらいには成長していた。
体育館裏のフェンスの外は細い道になっている。さらにその向こうは川だ。その道は特に用事でもなければ人など通らない道だ。
智美がゴンに気付いたのは、体育館裏のゴミ捨て場に行ったからだった。雨音に混じってどこからか犬の鳴き声が聞こえてきたのだった。小さい声、・・・普通なら聞き逃してしまいそうな声だった。
少し探し廻ってみると、すぐに見付けることができた。ゴミ捨て場から結構近かった。敷地を仕切るフェンス・・・金網の向こうにいる。智美は、近くにある裏門から道路へと出た。その犬・・・ゴンは雨に濡れてビシ

ョビショだった。悲しそうな声を出して震えている。

智美はかわいそうに思い、タオルで拭いてあげようと思った。今は持っていないが教室に戻ればタオルが置いてある。傘を、差したままダンボールを覆うように置き、校舎へと走り出した。しかし、ふ、と走っている途中で気付いた。

（相手は小犬。片手でも持てる）

走って戻り、小犬を片手で抱えもう一方で傘を持った。

（わたしってバカ。傘を置いて行くんじゃなくて、連れて行けばいいのよね。早く気付けばこんなに濡れずに済んだのに）

裏門を通って校内に戻り、その足で体育館裏の屋根のあるところまで来た。そこへゴンを置いて教室へタオル

を取りに戻った。
タオルで拭いてやったあと、両手で抱えあげてあげた。
その時、智美の手が暖かかったのか、智美には、ゴンがやっと、ほっとしているように見えた。

（そう言われてみれば、そこは全部体育館から見える場所だ。見られていても別におかしくはない。・・しかし、何もみんなで見なくたって・・・何をやってるんだか）
「そうなんだ。知らなかった」
「うん、だから、木原さんて、男子バスケ部では結構な有名人だよ」
それを聞いて、智美は顔を赤くした。
「え、・・・ちょ、・・・そん、え、・・・う」

恥ずかしくてうまく言葉にならない。
大石はそんな智美を見て笑っている。
「一週間くらいで、見なくなったけど、木原さんが連れてったんでしょ」
「うん。今は、うちで飼ってる。日曜日にわざわざ来て連れてってたの。・・・お父さんにせがんで・・・車出してもらって。ちなみに名前はゴンになってる」

土手の坂道を二人乗りでスイスイと登っていく。さすがに大石は体格いいだけあって体力がある。登りきると視界が開けた。電車からよく見る風景だが、今日はいつもと違って見えた。
季節がら緑が多い。

電車が鉄橋を渡って行く。
遠くに見える高速道路。
そこを走る自動車が見える。
立ち並んでいる高層マンション。
送電線の鉄塔。
川の水は、いつもより急いでいるように見えた。
何でもない景色が、今日は不思議と綺麗に見える。
雲は少し。天気は良い。
ちぎれた雲が流されていく。
風が吹いている。強くはなく、弱くもない。
(ちょうどいい。こんな日があるのも悪くない)
智美は視線を大石に向けた。
しっかりと前方を見ている。

（何を考えてるだろう）
同じようなことを考えているのではないか。そう思った。しかし、それは自分の勝手な想像と思い、やめた。訊いてみるのはいいか、と思ったが、自分がそんなことを尋ねるのはおかしいように思い、それもやめた。

辺りは住宅街に変わっている。
「この辺だよね」
「うん、次の交差点を右、それから信号二つ目を左」
無事、智美の家へと到着した。
「はい、鞄」
「うん、ありがとう」
「疲れなかった」

「大丈夫。わざわざ遠くまで送ってくれてありがとう、わたしなんかのために。大石君の方が疲れたでしょう」
「いや、これくらい軽い軽い。・・・それに『わざわざ』でもないから。ぼくの方が、木原さんと少し話したかったんだ」
（何をだろう）
智美は訊いてみようかと思ったが、
「それじゃ、また明日。試合、見に来てよ」
そう言って行ってしまった。
智美は、しばらくその後姿を目で追っていた。そしてそれが見えなくなった時だった。背後から声が聞こえてきた。ビクッとする。
「あれって、大石先輩でしょ。バスケの」

「なんだ、トシか。驚かさないで」弟の利通だった。
「・・・そう、大石君。あんた知ってるんだ」
「あの人目立つからね。結構有名だよ。・・・でも、どうして姉ちゃんを送ってきたの」
「そんなことどうでもいいじゃない」
「ひょっとして、付き合ってるの」
「え」
「いや、それはないか。うちの姉ちゃんじゃ」利通は頭ごなしに否定している。失礼な、と思ったが、確かにそうだと思い反論しなかった。「でも、ここまで送らせるなんて、結構、脈有りだったりして」
「別に送らせたんじゃないよ。送ってあげるっていうから、送ってもらったの」

「うそだ。うちから学校って結構あるじゃん。うちが学校から遠いって知ってたら、自分から送ろうなんて言わないでしょう」

それを聞いて、智美は、あ、と思った。駅への道をそれた時、大石は家まで送ると言った。そのときに違和感を感じたが、その理由がわかった。大石は、智美の家がどこらへんであるかを知っていたのだ。

(わたしって鈍いな。今頃気付くなんて)

智美はその理由を考えてみた。すると、すぐに思いあたることがあった。住所の載ったクラス名簿を配布している。それでだいたいの見当はつく。

(なるほど)

そう思う。ただ、クラスの人数は一人や二人ではない。

たまたま智美の家を記憶していたというのはできすぎのような感じだが、智美としては、そこまでは気が回らなかった。

（きっと名簿で記憶してただけだ。なあーんだ）

「まあ、付き合うことにでもなったら教えてよ。．．．ところで、はい」利通はそう言って紐を渡した。その紐の先にはゴンがつながっている。「ちょうどいいタイミングだよ。姉ちゃん、今日はゴンの散歩、サボるなよ」

その夜、ノックして利通の部屋へと入った。利通は机の上のパソコンを操作している。背後から画面を覗くと、検索のページで何かしら調べているようだった。まんざら遊んでいるようでもなかった。

智美は、こういった機械ものはまったくだめである。たくさんあるケーブル、たくさんあるボタン、見るだけでうんざりだ。パソコンは触るのも怖い。時代がら学校で操作をしなくてはいけないこともあるが、以前、たいした操作もしてないのに、動かなくなり、ビービーと音をさせ、専門の先生を呼ばなければいけなくなったことがあり、それ以来、できる限り避け続けている。

利通は智美とは大違いだ。ケーブルや機械は怖くないらしい。触っているうちに慣れてしまうようだ。

「なあんだ。遊んでるんじゃないんだ」

「一足遅かったね。さっきまでは遊んでた。今は自由課題の情報収集中。今週、発表なんだ。・・・姉ちゃん、『ピュリツァー』って人、知ってる」

「・・・、誰、それ」
「ハンガリー生まれのアメリカ人で、新聞社を経営してた人。この人の名前を取った賞とかあるんだ。有名な賞らしいよ。今、それ調べてるんだ」
「・・・ふうん、それが、『ながれ山　三四郎』」
「・・・『ピュリツァー』。・・・ところで、もうじき終わるとこなんだけど、姉ちゃん、使う。姉ちゃんの好きなバンドのホームページ、見つけたけど」
「ほんと」
「そのかわり、自分で操作すること」
利通は、智美が機械音痴と知ってて言っている。
「あんた、ほんと性格悪いよねぇ」
「姉ちゃんの機械音痴をなおしてやろうと思ってるだ

けさ。別に暴走させてもいいよ」
「いい、いい、結構」
(触らぬ神に崇りなし)
「そう。・・・で、何の用。姉ちゃんの方から来るなんて珍しいじゃん」
「うん、カメラ貸して」
智美は、利通がいくつかカメラを持っていることを記憶している。一眼レフを持つほど凝ってはいないが、それなりにいいカメラだ。
「珍しい、フィルム付きレンズ(使い捨てカメラ)しか使わない人なのに」そう言いながら机の引き出しからカメラを取り出した。「使い方教えようか」
「いいよ、わかるよ」

「オートフォーカスで、シャッターを一度半押しするんだよ。・・・知ってるの」

智美はクラッとした。単に押せばいいだけではないらしい。簡単な操作の仕方だけは聞くことにした。

「ところで、姉ちゃん、何を撮るの」

「え、ああ、『空』」

利通は眉をピクッと動かした。明らかに、また変なことを言いだしたと言いた気な表情だ。そして、たった今貸したばかりのカメラを取り上げ、別のカメラを取り出してそれを渡した。

今度のは、ファインダーの下に液晶のモニタがついている。智美の基準では、少しカメラっぽくない。

「さっきのと、どう違うの」

「デジタルカメラ」
今度は智美がピクッと眉を動かす。ただでさえ機械音痴なのに名前に「デジタル」とついていたら余計だめだ。
「やっぱり、そっちにして」
「やーだ」
利通にも言い分はある。智美が空を撮ったってフィルムの無駄遣いとしか思えない。智美もそれを言われると、機械音痴の自分が、すぐにいいものを撮れる自信はなかった。デジカメならフィルムを使わないので無駄の心配はない。
(うーん、一理ある)
「撮ったものって、このモニタ以外、どうやって見ればいいの」

「パソコンのモニタでもいいし、プリンタでもいいし、画像データを持って行けば写真にしてくれるカメラ屋もあるよ」

それを聞いて、しぶしぶではあるが納得した。

〈つづく〉

祭り

祝！ World Cup2002

テーマ競作『祭り』

松戸サイエンティスト

霜越邦彦

三、御祭日、どんどんひゃらら

和服姿の若い女性が御祭の出店街を歩いている。これ、みさをさん。松戸博士の研究所へ行く途中である。みさをさんは御祭がなんとなーく嫌い。小学校の頃に仲良かった男の子と、最後に会ったのが御祭の日だった。彼は引っ越してしまった。あとで、みさをさんは気付いた。彼をマーくんと呼んだ記憶はあったが、フルネームを知らなかったし、どこへ越したのかも知らなかった。

松戸研究所は松戸市民会館の二階の八畳間にある。みさをさんは襖を開けて中に入ると、そこにリールの付い

た釣竿を持っている博士がいた。海釣りでもしに行くのかと尋ねたが、そうでもないようである。どうも新しいマシンのようだった。

「博士、まさか、今日が祭だけに、『まぁ、つり号』なーんて、くだらない名前付けてないでしょうね」

「…」

「…」

博士は竿に貼ってあったネームプレートを徐ろにベリッと剥がし、それをクシャクシャと丸めて口に放り込んだ。モグモグとしてから飲み込む。

「当たり前じゃろ。そーんなダジャレ面白くもなんともない」みさをさんは目を細めて博士を見る。博士は一つ咳払いをして続けた。「まぁ、そんなことはどうでもよ

い。みさをさん、行ってみたいところは、あるかの」

　みさをさんは、怪しいなと思いつつも、さっき思い出したマーくんのことを考えた。過去へ行けるなら、彼のフルネームを聞いておきたい気もする。過去ではだめですよね、と訊くと、博士は意外にも、簡単簡単、と言い、みさをさんの首の後ろ、襟の所に釣鉤を引っ掛け、

「この鉤は帰ってくるまで取っちゃいかんぞ」そう言い「でやっ」と竿を振った。

「きぃぃやぁぁあああ！」みさをさんは擬餌鉤のように飛んで行った。そして部屋の壁にぶつかる、と思った瞬間、周囲がグニャリと歪み、気付くとまったく別の空間に到達していた。尻餅をつく。ドッスーン。「いったぁぁぁ！　な、なんなの？　ここ、どこぉお？」

周囲を見てみると、そこは幼い頃住んでいた町の神社で、今はお祭の最中であった。襟の釣鉤は付いたままで、糸はピンと張った状態だった。が、十センチ以上先の糸は空中で消えており、どうもその先は研究所につながっているようであった。みさをさんは辺りをよく見てみると、境内の方に幼い頃の自分と、マーくんがいるのに気付いた。どうも過去に来てしまったようである。おいおい、こんなんで過去へ来ちゃっていいの？　と思いつつも、みさをさんは二人を見ていた。ちなみに、この日の記憶は「彼と会った最後の日」という以外ほとんどない。
　みさをさんは何となく御祭が嫌いである。確かに御祭の最中は楽しいだろう。しかし、終わった後の静けさが好きでは無い。御祭を楽しんだ後に残るものって何だろ

う？　何も残らないように思えてしまう。楽しい時間とは「嘘」だったのではないか、そんなふうにさえ感じられてしまうのだ。それなら、最初から御祭なんてなければいいのに。そう思う。境内の二人は楽しそうに出店の方へと向かった。金魚すくいをする。綿飴を買う。お面を買う。安っぽい手品師のマジックに見入る。二人はとても楽しそうだった。

　やがて帰る時間になって二人は別れた。みさをさんはマーくんの後を追って声をかけた。そして、もう、彼女に会えなくて寂しくないかと尋ねた。しかし…、

「寂しくないよ。…楽しい思い出、沢山作ったから」

　彼は明るくそう答えた。胸が痛くなる。本当に御祭のあとには何も残らないのだろうか。去っていく彼の後ろ

姿を目で追っていると、幼い日の今日の記憶や感情が蘇ってきた。この日、確かに楽しかった。本当に楽しかった。彼との最後の記憶。それはとても大事な記憶だった。それを忘れていた。御祭の後の寂しさのせいで、…彼がいなくなった寂しさのせいで、楽しい大事な記憶を封印してしまっていたようだ。それは残念な事だし、彼に対しても失礼な事だと思った。目を逸らしていてはいけなかった記憶。人が成長するために必要な記憶。そういうものなのではないか。そう思えた。

そして、そう思った時だった。急に首根っこを引っ張られ、みさをさんは研究所に連れ戻された。釣り上げられたみさをさんを見ながら、博士は、

「おお、大漁大漁！　ウピョピョピョピョピョ…」

「あの…、わたし、魚じゃないんですけど」眉間に皺を寄せるみさをさん。しかし、すぐに柔らかい表情になり「でも今日はいい日だったから、許します」

「そうかそうか、それは良かったの」

「…あ、そうだ、名前」聞きそびれていた。「…ま、いいか」それはそれほど重要なことではない…。

テーマ競作『祭り』

祭礼

砂塔　悠希

涼気を含んだ風が、杜を吹き抜けた。
鼓を合図に、面をつけた舞方の踏み出しの音が響く。
白っぽい装束の袖を広げるようにして、扇を広げ静々と舞う。唸るような地謡の声にあわせ、甲高い笛が続く。

この町に来た日。僕はそれに出会った。
ふらりとバスを降り、目に付いた石段を見上げる。ほとんど手入れされていないような石造りの鳥居が申し訳なさげに木々の合間に埋もれていた。昇ってみようか、と思ったのはほんの好奇心。その先にあるであろうと予

測された、うら寂れた社を見てみるのもたまにはいいかもしれない、その程度のことだった。
森の中は鬱蒼として昼なお暗く、入る者を拒むかのように行く手を閉ざしていた。ひどく長い石段に息を切らし、もう帰ろうかと思いつつ昇りつめた先、石段の切れた先の、森の中にひっそりとその社は建っていた。
古い粗末な作りの社だったが、短い石畳の参道には塵一つなく、社も小綺麗に掃除されている。下の鳥居を見たとき考えていたような寂れた社でないことに少し驚きながら、裏へと回る。と、
「旅行者かい？」
背後で老婆の声がした。石段を登ってきたときには誰もいないと思ったのに。

「ええ」
振り返って答える。白髪の小柄な老女が、掃除道具を持って立っていた。
「そんだらば、日ぃが暮れん前に山ぁ降りた方がええ。今夜は祭礼の日じゃやけぇ」
「祭礼？」
老女は頷くと、くるりときびすを返し石段を下りていった。
一人その場に取り残された形になった僕は、つとつぶやいてみる。
「祭、礼……」
彼女は祭礼といった。『祭り』ではなく『祭礼』と。『秘祭』という言葉が頭に浮かんだ。

面白いかもしれない。地元ごく限られた人の間で行われる祭りを見ることができるのならば…。『特別な何か』を期待して僕は、ここで日が暮れるのを待つことにした。社の脇の森の中に踏み込み、適当な切り株に腰を下ろして、暮れてゆく山並みを見るともなしに見ているうち、いつの間にやらうとうとしていたようで、鼓の音に僕は目を覚ました。

美しい舞だった。見るものを圧倒しその世界に引き込んでゆく。裸の足が舞台を叩くたびに風景が溶けてゆく。そこには森も社もなく、ただ舞方と観客である僕だけがすべてから切り離され無の中に浮かんでいるかのように。祭りは滞りなく進み、舞もクライマックスを迎えよう

としているようだ。舞方が鬼女の面をつけて現れたとき、僕はそれに気づいた。その手に握られた刀が星明りの下、やけに現実的な光を映していることに。

　舞の相手方であろう面をつけていない神官姿の男が登場し、鬼女と舞をはじめる。無表情に舞うその神官の顔は、どこかで見たようなまったく見たことのないような不思議な感じがした。舞そのものは淡々として美しいのだが、それは幻想的というよりもひどく現実的で……。その刀の鈍い輝きが神官の頭部を薙ぐように通り過ぎて松明の灯りを映したとき、そこから尾を引いている赤いものが何であるのかに気づくのに、ひどく時間がかかった。

　まさか、と思った。

目をしばたいた。
そして、ゴトンという音が現実を連れてやってきた。
声は出なかった。ただ、後ずさりした。足の下で枯葉がなった。
けれど、舞台から目を離すことができなかった。
そして、鬼女の面が嗤った。

背を向けて走った。石段を転げるように駆け下りた。
どこまでも、どこまでも。

——今夜は祭礼の日じゃやけぇ——
老女の言葉が頭に響いた。
——今夜は祭礼の日じゃやけぇ——

テーマ競作「お祭り」

日報　楽しいベニア塗りをして

橋本　さかえ

どこの会社だってきっとこういう落とし穴は有るんだろうし、新人の仕事と言われれば「はい、そうですか」と納得してその為の準備をサービス残業でしなくちゃならないのだと半ば割り切って、でも「今日は用事が有るんだ」と帰って行く同僚を「また明日ね」と笑顔で見送り、

「いいのか。これで」

自分の身長ほどあるベニア板を白いペンキで塗りなが

ら私は呟いた。会社の倉庫はトラックと営業用ワゴン車が人一人・れる隙間を作り駐車してある。その一角をベニア板が五枚並ぶ。新人と呼ばれる私は他の新人二人と共に、三日目のサービス残業を始めていた。
「いいんじゃない。そのぐらい塗っておけば……」
　隣で同じように筆を上下に動かしている田中が私が塗ったベニア板を見ながら言う。シンナーに弱いという彼女は軍手を二枚重ねマスクをし、家から持ってきたゴーグルをかけ、ジャージを着ている。理由を知らない人がみたら、お、やる気だなーというスタイルだ。
「じゃ、なくてさ。こんな作業していることに疑問を感じるてるわけ」
「なるほど。わかった。もう一回さっきの言ってよ」

「……。いいのか。これで」
「……」
田中は無視してペンキを塗っている。私の問いを無視してだ。
「……。あのねぇ。あんたが言えっていたんだよ。答えなよー」
「どうしたもんかねー。今夜のご飯」
「あんたなー」
田中はへらへら笑いながら座り込んでベニアの下の方を塗り始めた。
私はこの一月に中途採用でこの会社に採用された。営業アシスタントという業務である。仕事内容は、いわゆ

る事務と同じだ。加工伝票を切ったり、仕入れの交渉をしたり、お茶を入れたり、コピーしたり。田中も私より二ヶ月遅いだけで同じ様な内容の仕事をしている。黙ってペンキを塗っている金子は総務に入って一週間。一日中数字を見つめて、ファイルを並べて、お茶を入れている。用事があるのと帰っていった竹中は十八歳、アイドルで、仕事は・・・事務らしい。この会社が始めてという本物の新人だ。高校卒業したばかり。研修期間というものもこの小さな会社にはあるらしく、お茶の出し方や電話の対応の仕方、挨拶の仕方など教え込まれながら、事務を覚えている。

「マナー教室だね」

一言多い田中が竹中に笑いながらそう言った。でも、

竹中を見ていると会社の判断は正しいかと思う。竹中の電話の対応を聞きながら静かに首を振ってる部長を見てしまったりすると。

このどう見てもまとまりの無い新人たちが何故ベニア板にペンキを塗っているのか。

「だいたい町内会の桜祭りと、会社とどう繋がっているのだろう」

「……。私、田中なら上に聞いていると思った。あんたも知らないの？」

「知らない。知らない。何気なく聞いたんだけど、適当に返事されちゃってさ。ごまかされたのか、本当に伝統なんだかわかんないのよ」

「えっ、新人がベニア板ペンキ塗るのも伝統で、うちが

祭りに参加するのも伝統なわけ」
「やっぱり、政治的賄賂な関係とかさ。あるかもよ」
「町内会費以外にも賄賂を払っているわけか」
私は筆を下ろしながら呟く。
「えっ、町内会費とか払っているの」
田中がすごい勢いで私を見上げた。ゴーグルとマスクの顔があらためておかしい。
「アハハハハ。あんた。アハハハハ。その顔で私見るのやめてくれる。アハハハハハ」
「笑うな。私のお肌はとても敏感なのよ」
「だって。そのフル装備でアハハハハ」
「…………。笑いすぎだってば。で、町内会費っていくらよ」「五百円」

「……。は？」

「五百円、経理のみちこさん、払っていたよ」

何の感想もなく、田中は作業を開始し、私も筆を動かし始める。しばらく筆の動く音と時々外を走っていく車の音が聞こえるだけの空間になる。こんな作業高校の文化祭以来だ。と、何度も考える。あの時はこんなことするのもう生涯できっと、絶対ないだろうなぁ、と考えはりっきていたような気がする。

「五百円、って、五百円」

「田中。あんたねー。うちの会社をなんだって思ってるの」「五百円払って、町内会のさくら祭りに参加してなんの意味があるんだろう」

「ん、五百円の年間十二回だから六千円だろう」

「いやさ。そういう問題じゃなくてさ」
田中がペンキを塗りながら上を向く。
「アハハハ」
「だから、笑うな」
「終わった」
今まで黙って作業をしていた金子が腰を伸ばしながら立ち上がる。仕事に無駄のない金子は、作業にも無駄がない。真っ白なベニア板はむらもなく仕上がっていた。
「帰る。私のノルマ終わったから」
「あ、うん。お疲れさま」
私も田中も頷く。
「あのね、祭りのことだけど」
「うん」

私も田中も少し焦りながら筆を動かし、金子に生返事をする。
「社長がお祭り好きなんだって」
金子はそうぽつりというとお疲れさまと小さなドアを出ていった。
「・・・」
「なんだとぉぉぉ」
桜祭りまであと四日である。

テーマ競作「祭り」

後の祭り？

白坂　匡

「え？　ジョーが戻ってこないって？」
友達（ダチ）の彼女（オンナ）の涙ながらの電話で、俺はその惑星（ほし）を調べる羽目になった。
　その惑星では、年に一度大きな祭りが行われるという。どんなに遠い星に旅立った者も、必ずその祭りの為にその日だけは故郷に帰ってくるらしい。

しかし、その期間中は異星人は一切立ち入り禁止となる。だから、何の祭りなのかは一切外の世界には知られていない。別に、彼らは特別閉鎖的なわけではない。普段はちゃんと宇宙港は開放されていて、給油や補給もできるし、ホテルもあるし観光旅行だってできる。犯罪発生率もゼロに近く、バカンス先としては結構人気だそうだ。なのに、観光の目玉だと思われる盛大であろう祭りに関しては、一切秘密なのだ。

隠されると知りたくなるのが、人間の原初からの悪癖である。これまで何人もの特ダネ狙いのジャーナリストが探ろう試みたが、彼らが帰ってくることはなかった。別に行方不明になるわけではない。その惑星に住み着いて、帰ってこなくなるのだ。理由を聞いても、納得行く

返事は返ってこない。その惑星が気に入ったと言うだけなのだ。

ジョーも一攫千金を狙ってその祭りに忍び込んだらしいが、どうやらご多分に洩れずその通りになったらしい。

「向こうで新しい女でも見つけたんじゃないか？」

「でも、いつものあの人の様子と違ったのよ！催眠術にでもかけられて、誰かに操られているのように！」

俺の適当なあしらいに一向に引かぬ女を前に、俺もちょっとおかしいと思い始めていた。そもそもいい加減な奴だからひとつの星に入れ込むなんて今までなかったし、彼女は奴にはもったいないいい女で結構ベタ惚れだったのだ。あれ以上いい女が奴に引っ掛かるとも思えない…。

しようがない。俺は、その惑星（ほし）に行ってみることにした。祭りはとうの昔に終わって、街は他の惑星となんら変わるところはなかった。ジョーは、すぐに見つかった。街中に部屋を借りて普通に暮らしていた。

「やあ、スージーが迷惑を掛けてるようだな。」

「まあね。一人で住んでいるいるのか？」

「ああ。気楽なもんさ。」

「なんでまた、こんな牧歌的な惑星に住み着く気になったんだ？　今まで根無し草だったお前が。」

「今までの落ち着かない暮らしに飽きただけさ。俺もそろそろいい歳だしね。危ない橋を渡るのはやめて落ち着いたんだ。」

「じゃあ、スージーも呼んでやればいいのに。女ができたか、洗脳でもされたんじゃないかと心配してるぜ。」
「あいつにこの惑星は合わないさ。それに異星人の定住はご法度だしな。」
「お前だって異星人のはずだろ？」
「まあね。でも、俺は例外として認められただけだ。」
「ふ〜ん。」
納得はしなかったが、それ以上突っ込まなかった。言わないと決めてる奴が、口を割ることはありえないからだ。
その晩、俺たちは昔話に花を咲かせて朝まで飲み明かし、俺はおとなしくその惑星を離れ、彼女に奴が帰ってくることはないと告げた。
しかし、俺は諦めなかった。

確かに俺が会ったのは、奴だった。外見は変わっていなかったし、昔のことも覚えていた。だが、奴ではなかった。奴のチャランポランが治るはずはないのだ。俺は、祭りに潜入することを決心した。奴にできたことが俺にできないことはなかった。俺は潜入に成功した。

しかし……！

なんと、一年に一回、無作為(ランダム)に体とそれを取り巻く環境ごと交換していたのだ。そしてその人間として暮らす。例外はない。何故かというとこれは自然現象なのだ。その日、ある一定以上の年齢に達した惑星上にいる全ての知性ある生き物が対象となる。万が一、高い知性を持った犬とかがいたら、きっと対象になることだろう。当然

この惑星には動物の知性を高めようなんて研究はされていない。前の体の記憶も次の体の記憶も受け継がれる。犯罪発生率が低いのも道理だ。次は自分がなるかもしれない相手を襲ってどうする！？だが、大富豪もいない。いくら儲けたところで次の年に他人のものになるのだし。文明もある程度で停滞している。ただし、離婚率は高い。結婚した相手が変わるんだから、しょうがないさ。

さて、今ここで祭りのことをしゃべっているのは、俺自身か俺の体を引き継いだ奴なのか、どっちでしょう？

不定期連載第6回

黒竜に騎る男

砂塔悠希

前回までのあらすじ

スカルツ王国の第3皇子クリストファー（クリス）は、エルフ王グレイバラロレフを祖父に持つ１／４（クォーター）エルフ。

この夏の初め、スカルツ北部地域のハイランドの北部にあるドワーフ族最大の城キルサーン城が、ハイランドの北に浮かぶ島魔族の国オーガーの突然の侵攻により陥落し、先のエルブン戦争を治めた聖剣のひとつであるダーク・ソードが奪取された。デュアル・リゲイリア―覇王の宝称と呼ばれる４つの神器のうちの一つである。

事態を重視したスカルツ国王アーサーは、第2皇子アレックスにオーガーの動向を探らせるために、領国各地への巡回を命じ、まだ見習い騎士だったクリスにその１／４エルフの能力を以て、デュアル・ソードを水竜から預かりおくよう命じたのだった。

クリスはデュアル・ソードを水竜から預かる過程で、奇しくもオーガーの戦士と出会い、オーガーの真の目的が覇王の宝称を利して世界を支配することであることを知った。オーガーが次に狙うデュアル・リゲイリアを守るための皇太子スチュアートの出陣を前にして、アーサーはクリスにキルサーンの城で落ち延びているはずの、神官チャ・ザとドワーフ族の皇子シャナ救出を命じた。

クリスは友人のルディを伴い、キルサーンに潜入するために、ドワーフの街道の場所を尋ねるべく、幼いころの友人であるエルフ族のサラを訪ねるが、エルフ族の里アールブヘイムで起きた変事のため、サラがバレンツの岬にある黄金樹のもとへと旅立った事を知った。

サラを追いかけようとしたクリスにスィロカムラスという若いエルフが同行を申し出て、一行はバレンツの岬へと向かうのだが……。

危惧していた背後からの襲撃はなく、三人は朝を迎えた。霧の向こうに丘のシルエットが見え始める頃、三人は岬に向かって出発した。

鳥の声と風の音、ざわざわというヒースの葉擦れに海のざわめき、柔らかな陽射し。自然はそこに住まう者どもの争いなど意に介さぬかのように滔々と営みを繰り返す。

「あれが目的地か？」

前方にまばらな木々が見え始めたときルディが言った。木々の奥にここからでもはっきりとわかるひときわ大きな樹、黄金樹だ。

「ああ、バレンツの岬だ」

心なし三人の足取りが速くなる。風が祝福を与えてく

れるかのように彼らの背を押していた。息を整え、周囲を警戒しなければならない。理解ってはいるが、心を抑えきれない。あそこには民を救うために、危険を顧みずただ一人旅立った仲間がいる。知らず命を危険にさらしているかもしれない家族がいる。目的地へ到達するための鍵がある。それぞれの思いが彼らの歩みを速めてはいたが、森までの数マイル浮き立つ心を抑えながら、三人は一直線に草原を進んだ。

森に入って間もなく、周囲の異常に気がついたのはスイロカムラスだった。

「────────！　なんということだ」

何かに怯えるように首を巡らせると、走るような勢いで黄金樹を目指す。

「あ、おい！」
止めようとしたルディの肩を押すようにして、じっと前を見つめたままクリスも歩調を速めた。
「いいから、行こう」
森の中を走るエルフ族に重装備の人間が追いつくはずもない。森の中に姿を消したスィロカムラスを追って、二人は黄金樹を目指した。簡単な革鎧と細身剣（レイピア）のみを身に着けたスィロカムラスに対して、剣が違うだけで同様な兵装のクリスはともかく、甲冑とまではいかないが金属鎧に長旅に耐える旅装のルディは、瞬間的にはともかく長い距離を走ればすぐに息があがってしまうだろう。呼吸が乱れれば注意も乱れる。注意が乱れればとっさの

状況に対応するのに遅れが出る。それが致命的な遅れとなる可能性は、この魔族の出没する昨今では大といえるだろう。

森は水を打ったように静かで、二人の足音以外は風の音しか聞こえない。聞こえてきていいはずの鳥のさえずりも葉擦れの音すらも。その中を黙々と黄金樹を目指す二人の前に、ふいにぽっかりと森が開けた。

中央に黄金樹がそびえている他は何もない。いや、樹の前に１つの人影がある。肩甲骨の辺りまで伸びた流れるような白っぽい金髪、先のとがった特徴的な長い耳、その肌は透き通るように白い。緑色のチュニックの腰に差した細身剣と背にした弓はよく使い込まれている。樹に両手をつき、頭を垂れて何か一心に祈っているようだ

……

「誰！」

誰何の声とともに振り返った人影にびくりとして、二人は歩みを止めた。名乗ろうとでもしたのか憤然と背筋を伸ばしたルディの背中がピクリと硬くなる。声をかけようとして開きかけた口をクリスは引き結んだ。

人影の右前方に、森の中から下草を踏み分ける音すら立てずに進み出た３つの影。犬のような顔、半開きの口元からは大きな黄色い牙がのぞいている。ぽとり、とその口から唾液がしたたり落ちた。ふさふさとした犬のような尾が、ゆらゆらと揺れている。抜き身で持った粗末な短剣には、錆さえ浮いている。コボルトだ。本来、臆

病で卑怯な妖魔だ。負ける戦いはしない。彼女が一人っきりだと見て襲いに来たのか、背後がいるのか。いや、残忍な光を浮かべている瞳の色からすれば前者か。女一人が相手なら勝てると。
「サラ！後ろっ！」
「えっ？」
呆けたような表情になる人影に舌打ちし、抜刀して駆け出す。ルディも後を追うように抜刀するのが気配でわかる。サラの右を抜けて、二人は剣を正眼に構えた。
「サラっ！下がって！」
背後を見ずに叫ぶ。と、
「冗談言わないで。誰があなたに剣を教えたと思っているのよ！」

叫び声が帰ってきた。だが、勇ましい言葉とは裏腹に前に出て戦う気はないようだ。腰にした細身剣（レイピア）を抜くのではなく、背にした弓に矢を番（つが）える音がした。

シュンッ

矢が空気を切り裂く音を合図に、クリスは間合いをつめると左端の一体に斬りかかった。同時にルディが右端の一体に斬りかかる。クリスの攻撃は短剣で受け流された。踏鞴（たたら）を踏んで立ち止まると後ろに跳び退（すさ）って短剣の間合いから離れる。ルディの攻撃も失敗したようだ。矢は中央の一体が手にした短剣で振り払ったようだっ

たが、時をおかずに放たれた２本目の矢が短剣を持つ腕に突き刺さった。
ギャン！
情けない声を出して、中央のコボルトが怯んだ。しかし、その様子を見てさえ、左右のコボルトはまだ、戦意を失わない。中央のコボルトも、腕から矢を抜き去ると憎々しげにこちらを睨んだ。どちらに加勢すべきか迷っているようだ。
『操られている？』
そんな考えが頭をよぎる。しかし、それもすぐに眼前の敵の動きに遮られた。コボルトが短剣を振り回しながら突進してきたのだ。クリスは剣の間合いに入るのを待ってコボルトを袈裟懸けに切りつけた。肉を切る感触が

手に伝わってくる。断末魔の悲鳴をあげてコボルトがくずおれた。
ピウウウウウウウウウ
甲高い笛の音のような音を残し、ルディが相手をしていたコボルトも首から上を失ってドウと、後ろに倒れる。
と、腰の引けていた中央にいたコボルトの眼窩と首筋に、同時に２本の矢が突き立った。
「！…………」
風の声に耳を欹(そばだ)たせる。樹上にスィロカムラスの気配、後は……。
「お、終わりか？」
ふぅぅぅぅ、と長い吐息をついて動き出そうとするル

ディを手で制し、じっと正面の森を見据える。剣を剣帯に戻し、手で小さく印を結びながらエルフ語でつぶやく。
『風の精霊シルフよ。刃となりて我に敵するものを割け』
　シュッという音とともに風が前方の森の中へ吹き込む。
　ギィァァァァ
　森の中、そう遠くないところで悲鳴が上がる。止（とど）めを刺しにルディが駆け出した。
「よく……」
　背後で樹上から降り立ったスィロカムラスが、驚いたような声を上げる。クリスはそれには答えず、ゆっくり

と目を閉じた。風（シルフ）のささやき、木々（ドライアド）のざわめきに耳を澄ます。敵の気配はない。しかし……。
「スィムス……」
サラが後ろを振り向いて、言葉を失う。駆け出してその胸に飛び込んだ。
「ご無事で」
ぎこちない手つきでスィロカムラスがサラの髪を撫でるのを気配で感じながら、クリスは目を閉じたままゆっくりと黄金樹に向かって歩き出した。
ずるずると森の中でこときれた妖魔を引きずって、ルディが戻ってきたのを確認してから、クリスは黄金樹に両手をついた。

ザワリ、と耳元で葉擦れの音が聞こえる。融けてゆく感覚。揺らめく淡い輝きを感じ取る。
ふ、と手を離す。現実が一度に戻ってくる。息を吐いて振り向く。
「黄金樹は、無事、だよ。もう、森を保つことはできないようだけれどね」
言葉を切りながら告げる。ただこれだけのためにここにきたサラは、しかしこれを感じ取れたのであろうか？
「無事……？でも、私には何も答えては……」
サラが、怪訝そうにつぶやく。その気持ちはわかる、とクリスは思った。祖父グレイバラロレフと同じく、今となっては、すでに里にただ一人となってしまったエンシェントエルフである長老。その娘、サラにならば或いは

と、里の民たちも期待をかけたのであろう。けれど…。
「……確かに、亘りが必要なようだね。何かが歪んでいるんだ。」
「歪み？　歪んでいる…？」
スィロカムラスが不思議そうに繰り返す。
「ああ。もうこの樹も長くは保たない。ルディ」
クリスは樹を振り返って答えると、ルディを手招きした。
「？」
少し離れたところで会話についてこられない様子で、眉間にしわを寄せていたルディは、もっとわからない顔をしながら近づいてきた。
「ちょっと、行ってくる。身体、預かっててくれるか？」

「い、行ってくるって……？」
さらにわけが解らないというように、聞き返すルディに問いで答えたのはサラだった。
「――――まさか、ここで亘りを？」
呆然としたようなサラの声に、激しく反応したのはスイロカムラスだった。
「無茶です！ここでは何の準備も出来ないではないですか！儀式に足る人材も道具も……」
「必要ない。俺は〝亘る者〟だよ。何の準備がいるって言うんだ？」
即座に口をはさむ。トーンを抑えて。それだけで通じるはずだ。
「！」

次の句が接げず、スィロカムラスが息を呑む。

「そう……そうなのよね。やっぱり、それしかないのね。」

深い嘆息とともに、サラが何かをあきらめるような口調で同意しようとした時だった。

「〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰！！！　だっっかっっっらっっ！なんだっていうんだよっ！　俺にもわかるように話せよっ！」

なかなか話が見えてこない、けれど何かサラやスィロカムラスの態度に危機感を感じていたのか、ルディが忍耐も切れたというかのように怒鳴りつけた。

誰も答えない。沈黙は更に空気をかたまらせる。仕方なく、クリスが口を開いた。

「……………………時間がないんだ。日暮れまでに戻らないと厄介なことになる。」
「説明は、私がするわ。お願い。里を、民を、救って」
サラの瞳から涙が零れ落ちる。透明な、純粋な涙。民を救いたいという純粋な思いだけが彼女を衝き動かしていたのか。けれど……
クリスは、一度黄金樹を見上げると、つぶやいた。
「行くよ」
そして、その根元にゆっくりと腰掛ける。樹に背中を預け、眠るように目蓋を閉じた。
「で？」
「…………」

半眼で問うルディに、黄金樹の根元に眠ったように寄りかかるクリスを囲むように円座して二人は目を合わせないようにクリスを見つめていた。いや、スィロカムラスはその問いにすら気づいていないようだ。

「いとも、簡単に……」

「当然よ。〝亘る者〟なんだもの」

ルディの正面に座るサラがクリスのほうを向いたまま口を尖らせて答える。そう、これが、違い。ただのハイエルフと、〝亘る者（選ばれし）〟との。

「前の妖精王であったグレイバラロレフ王ですら、安全な場所で、儀式を行った上で亘りを行ったというのにね。多分、真実、〝亘る者〟なのは、この子だけなのでしょ

うね。」
「え？」
怪訝そうに聞き返そうとしたスィロカムラスの声をさえぎるように、ルディが唸る。
「だーかーらー」
「あ、そうそう。ごめんなさいね。はじめから話すわ」
そこではじめて気づいたかのようにサラが、ルディに向き直った。
「サラっ」
スィロカムラスの声を無視するかのように、サラは話し始めた。
「亘り、ってわかる？」
問われてルディは首を振った。クリスが何か言ってい

たとは思うが、正直よく理解してはいなかった。ただ、ここにサラを救いに行かなければならないのだということしか解っていなかった。

「亙りっていうのは……」

サラが説明してくれたのは、大体こうだった。

信仰をもたないエルフ族にとって世界の意志を知る唯一の手段が亙りというものだ。それによって世界の、精霊界と物質界のすべてのことを知るのだ。自然界で起こるすべてのことを知る、それはエルフがエルフとして生きていく上で何よりも大切なことだった。その亙りを可能にするのが、黄金樹という精霊界と物質界を繋ぐ大地と森の生命の源となる木。多くのエルフはこの黄金樹と亙ることで世界の意志を垣間見る。そして、この黄金

樹は世界を支えるという、世界樹ーユグドラシルーとの亘りの入り口だとも言われている。世界樹（ユグドラシル）と亘ることのできるのはほんのわずかなエルフだけだ。アールブヘイムでは亡くなったグレイブ王と、その孫である1／4（クォーター）エルフのクリスだけが、世界樹と亘り世界の意志を明確に知ることができるのだという。しかし、クリスは里を出、王も亡き今、世界樹と亘ることはできるものはない。黄金樹と亘ることでしか、アールブヘイムのエルフたちが世界に触れることは出来なくなってしまった。けれど、そのアールブヘイムの黄金樹はある日突然、何も答えてくれなくなった。

「だから、あたしが皆の代表として他の黄金樹を探すことになったのよ。本当は、すぐにでもクリスを呼びに行けばよかったんだけど」
サラは、目を伏せそのまま黙ってしまった。その視線が示す先にクリスがいる。じっと、眠ったように身じろぎ一つしないで樹にもたれかかっている。その視線を追ってクリスを見ていたルディが、静かにサラを見つめて言った。
「何で、そうしない？　最初っからそうしてれば、俺たちがこんなとこまで、あんたを追っかけてこなくてもすんだじゃないか」
簡単な方法があるのがわかっていてそれをしないのは、納得できない。彼らの力を持ってすれば、出奔した

クリスを探すことなど造作もないだろう。漠然と、そう感じる。責めるつもりはなかったのだが、口調に苛立ちが含まれる。
「できなかったのです」
と、スィロカムラスが静かに告げた。
「なんで？」
即座に問い返す。たら、れば、という問答は好きではないが、敵に占拠されたキルサーン城で救いを待っているであろう幼いドワーフの皇子を迎えにあがるためには、時間を無駄にすることは致命的なような気がする。実際、こんなことにかかずらっている暇はないのではないか？
「それは……」

言いよどむスィロカムラスの後を続けるように、静かにサラが言った。
「この子の亘りのやり方を他の民には見せたくなかったのよ、長老（ちち）は」
「？」
きょとんとした表情を向けたのはルディだけではなかった。
「さっきも言ったでしょう？　真に〝亘る者〟なのはこの子だけだって」
「……」
二人の不理解の表情に、僅かに嘆息を吐くとサラは続

けた。
「亘りの方法には２種類あるの。黄金樹と亘るのと、世界樹と亘るのとの２種類。黄金樹と亘るときは、樹に手を触れていさえすればハイエルフであれば、――力の強弱で多少の違いはあるけれど、誰でも亘ることはできるわ。さっきクリスがしていたみたいにね。けれど、世界樹と亘るには…グレイブ王ですら、数日は儀式というか、力を高めてから亘りに入っていたの。けれど、この子はあんなふうに、何の前置きもなく亘りに入れるの。それが何を示すかなんてことは……」
「……やはり、我らが世界の意思から見放されたという噂は……」
スィロカムラスの呟きに、サラは小さく首を振った。

「噂になど惑わされないで。でも……。何かが変わりつつある。それを恐らく民は、長老は受け入れることができずにいる。この子を〟亘る者〝として受け入れるということは、変化を受け入れること。人に近いこの子が、これまでの誰より精霊に、世界樹の近くに受け入れられているという事を認めることは、これまでのエルフとしての生き方をも否定しなければならないかもしれないということ。」

環境の変化を、特に自分の身近に突然起きたそれを受け入れるのは容易いことではない。否定することでそれを遠ざけられるなら、なおのことだ。それはつい最近自分の身の回りにもおきた。だから、理解る。ルディは、小さく頷いて先を促した。

「世界樹と亘る、ということは、精霊王と語る場を与えられているということ。グレイバラロレフ王が、森を封じたように、精霊力を乱すことも正すことも精霊王ならできる。それを願う場を与えられているということ。すなわち、場合によってはいかなる精霊であろうとも、その支配下におけるということ。」

サラは、静かに目を伏せるとじっと黙った。まるで、彼女の言葉が二人に浸透していくのを待つかのように。そして、ふと思い出したとでも言うかのように続けた。

「そして、もう一つ。――――亘りは危険を伴うの。」

「へ？」

きょとん、とした目になってサラを見るルディをじっと見つめながら、サラは続けた。

「亘りの最中はまったく意識がなくなるのよ。クリスが言うには意識を樹に滑り込ませるんだって。だから身体のほうが全く留守になる。何があっても反応できないし、そんなときに襲われたりしたらどうにもならないって。だから…」

「――――――――――――――――っ！」

何で、それを早く言わないっ！　思いは言葉にはならず、ルディは、バッと立ち上がりクリスを振り返った。『預かっててくれるか？』の意味にようやく思い当たり、知らず力の入っていた肩から長い吐息とともに力を抜く。

「馬鹿が…」

呟きとともに、すとんと腰を落とす。いつどこから敵

が現れても、戦えるよう適度に力を蓄えながら、心の中で毒づいた。

まったく……ばかやろぉ……

何故に見つからぬのか？　決して大きな城とは言えぬものを……

玉座に体を預け、エバンスはイライラと足を鳴らした。マーラの手配した盗賊が到着し、すこしずつではあるが隠し扉が暴かれつつある。しかしそのどれもが財宝を隠すためのものであり、脱出路を示すものはひとつとしてなかった。一体いかにして奴等は脱出を果たしたのか？それとも、もともとチャ・ザはこの城に居らず、死んだドワーフ王につながるものも存在しないのか？チャ・ザ

が不在であったことは考えられなくもないが、その可能性をエバンスは認めたくなかった。勘でしかない。しかしチャ・ザは確かにここにいたのだ。そして、今も息をひそめこの城のどこかにいるのだ。そう信じるしかエバンスに採る道はなかった。でなければ何のためにあの少年騎士がここに向かっているというのだ。必ずや見つけ出し、息の根を止めてくれる。

エバンスはギリギリと奥歯を噛みしめ、足を踏み鳴らした。

っダンっ——

「気をお静めになって。士気にかかわりますわ」

不意に背後に現れた女に、ギッと暗い目を向ける。その八つ当たりの視線を、風を受ける柳の枝のようにすい

と受け流して、女――マーラは形のいい唇に小さく笑みを浮かべて言った。
「そのように睨まれては、手元を狂わせてしまいます。どうか、気をお静めになって」
フン、と鼻を鳴らしてエバンスは彼女から目を離し、正面の美しい女神の横顔を描いたレリーフを見やった。
大地と豊穣の女神ラナーテ。肥沃な大地を待たぬこの地ではあまり信者はいないと聞くが、大地の民であるドワーフ族はこのような神を崇めるのであろうか？
「マーラ」
傍らに佇み、じっと手下達の作業をともに見ていたマーラに問いかける。
「はい？」

「あれは、何だ？」
レリーフを指さしながら問う。
「……大地の女神のレリーフのようですが……」
そう言ってマーラは、細い顎に曲げた人差し指をあてて小首を傾げた。レリーフからはずした視線は宙をさまよい、口の中で小さく、でも、とつぶやいた。
エバンスは片眉を上げただけで、先を促した。
「あ、いえ……確か、大地の妖精族が信仰しているのは戦神だったような……」
戦神？闘神か？であれば……
「あれは、何だ……」
呟きを質問ととったのか、マーラは一瞬、怪訝そうな顔を見せた。が、すぐに合点がいったのか、ぐるりと玉

座の間を見回し始めた。そして、その目が、玉座に留まる。
「そういえばこの玉座……」
細かな細工の施された背もたれはマーラの背丈よりも高く、柔らかな布張りの座面は、エバンスが腰掛けていてもまったく違和感がない。違和感がないからこそマーラはくすりと笑った。
何だ、というように目を上げたエバンスに、くすくすと笑いをとめることなくマーラは答えた。
「いえ、この玉座にドワーフの王が座しているところは何か滑稽のように思われましたので」
「滑稽？」
「王たるものが、玉座から降りるたびにぴょんと飛び降

りるのかと思うと……」
「言われてエバンスは自分の座る玉座を見下ろした。多少窮屈ではあるものの足が余って座りづらいということもなくごく自然に腰掛けることができている。ドワーフは一般に十才位の少年程度の身長しかないという。
……崇めてもいない大地と豊穣の女神のレリーフ、体格にあわない玉座、やけに天井の高い部屋、見つからないドワーフたち……。
エバンスは腕を組んで玉座の間を見回すべく、首を廻らせた。そして、ふと眉に力を込める。くすくすと忍び笑いを続けていたマーラもその様子に笑うのをやめ、神妙な顔つきになってエバンスを見つめた。
つまりはそういうことなのか。ここは、人間族と会談

をするためのそれだけのための部屋。それも、親密な関係にあるスカルツの王族たちではなくその他の人間族のための。それゆえ、スカルツの国教である守護神像（トゥルース）ではなく大地母神像（ラナーテ）を飾っているのだ。恐らく本体は別の場所にある。そしてここそが真のキルサーン城なのだ。

エバンスは、奥歯をぎりぎりと噛み締めるとやおら立ち上がった。

っダンっ――――――

「？」

踏み抜かんばかりのその靴音に、床板が反響を残しな

がら悲鳴を上げる。
　と、ふいに思い立ってどたどたと鈍重に走り回る魔族の部下を呼び止めた。
「この周りを走ればいいんですかい？」
　濁音の多い不快な声で、その豚面の魔族は繰り返した。
「早くやれ」
　エバンスはそう指示すると、玉座にかけたまま目を閉じた。
　ダーンダーンダーンダーンダーン
　床を歩いていたときと明らかに違う音がする。エバンスは厳しい顔つきを変えずに、マーラに声をかけた。魔族は言われるままに玉座の周りを走り続ける。呼ばれたマーラは首を傾げ、エバンスの前に立った。

ダーンダーンダーンダーンダーンダダダドドドドドドドダダダーンダーンダーンダーン
走り回る魔族の足音を確認するようにエバンスは目を閉じ、身じろぎもしない。マーラも音の違いに気づきはっとしたように目を上げる。
「もう、いい」
ようやく制止の命令がでてほっとしたように、魔族は息を荒げながらエバンスのそばを離れた。
「――――地下、か」
エバンスは静かに呟くと、マーラに視線を向けた。マーラは小さく頷くと部下の手配に走った。
淡い光の中を浮遊する。亘りの時にいつも感じるのは

大きな手のようなもの。幼い頃、自分を抱いてくれた祖父の手のようにあたたかな大きな手。その手の中にふわりと降り立ち、頭を廻らす。と、一本の大きな樹が眼前に現れる。どこまでも大きくすべての方向に根を張り、枝を張っている。どこまでもまっすぐで一つでしかない。どこまでも続きどこへも行かない。総てであり無である。無であり総てである。世界の根幹たる樹、世界樹（ユグドラシル）。その樹を前にし、世界に触れる。と、

『久しいのぅ。幼きものよ』

　不意に声がする。いや、思念を感じる。

『王？』

　背後に気配を感じる。振り返ることもなく、眼前に老

木のような形をした人のようなものが現れた。森の精霊王だ。世界樹はいつのまにか背後にある。つまりはそういうところだ。

『盟約に従いて…』

語り始めようとした森の精霊王を制してクリスは言った。口には出さずとも思えば伝わる。けれど、解ってはいるがつい口に上らせてしまう。

『歪みを…感じました』

『歪み？』

森の精霊王はその言葉を反芻するように繰り返した。形のないこの場所に対して、歪みと言うのは正しくないかもしれない。揺らぎというか違和感というか常と違うものを感じたのだ。それは、王にも通じたようだ。

『あるべき姿に。そのために我々は何ができるのでしょうか？』

　と、不意に風を感じる。もう一つの顔が、森の精霊王の横に並んだ。空気の塊が渦を巻いているようなそれは、風の精霊王の姿であった。ふと見ると青く澄んだ水の乙女のような水の精霊王の姿も、焔の柱のような火の精霊王の姿も見える。クリスは知らず頭を廻らせていた。クリスを取り囲むように現れたあらゆる精霊の王たち。それがいっせいに声を上げていた。

『〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰』

　あまりの大音声に耳をふさぎたくなる。だが、耳をふさごうと思念の声はやむことなく頭の中に入ってくる。口々に語る声が頭の中でわんわんと響き渡り、その波の

流れに翻弄され、ついに自分を見失いそうになったとき、不意に声がやんだ。
しん、と静まり返った場で、耳をふさぎ、目を閉じて蹲っている自分に気付き顔を上げる。
『？』
泣いていたのかもしれない。かすんだ目には何も映らない。ただ、精霊王たちがまだそこにいることだけが感じ取れた。
『幼きものよ』
語りかけたのは森の精霊王だった。すぅっと霧が晴れるように、かすんでいた目に老木のような精霊王の顔だけが見えるようになる。
『…………』

『盟約に従いて我は汝を守護する』

『盟……約……？』

　祖父の交わした盟約の内容にどのようなものがあったのか、幼かったクリスには覚えがなかった。けれど……。

『波に逆らえば、うねりを生じ、うねりは、新たなる波を生ずる。波に逆らいし者は、肉を持つ者。理を知らず、過ぎたる力を行使せしめんとする者。力は彼の者のものにあらず。彼の者その力の本意を知らず。波に迷いし者、導くは我らにあらず』

　森の精霊王の言葉は、どうやら精霊王たちの言葉をまとめたもののようだ。受け取り手であるクリスがパニックをおこしかけたので、その精神を守るために森の精霊

王が彼らを代表したのであろう。祖父と交わした盟約に従って。
しかし……。波に迷いし者？波が乱されたのは偶然なのか？
『世界に触れよ。さすれば道も見得よう』
『世界に？』
聞き返しながらゴクリとのどを鳴らす。世界樹が眼前に現れた。
『世界に……』
恐る恐る伸ばした手が幹に触れる。いや、幹が近づいてきて手に触れたのか。指先にピリリとした刺激を感じ、思わず手を引く。恐れるべきことではない。それは解っている。抵抗さえしなければ、いつでも入れる。けれど

も……。先ほどの、押しつぶされ流されそうになった恐怖が抜けないのだ。
クリスはこぶしを握り、きつく目を閉じて激しく頭を振った。まるで恐怖をふるい落とそうとでもするかのように。
――恐れることはない。知ることは識ることではなく見ることは視ることではない。――
祖父の言葉が脳裏に浮かぶ。我々は傍観者ではないのだと。そのためにここにあるのだと、祖父は言った。為すべき事を成すために、我々はここに来る許可を与えられているのだと。
世界樹の与えてくれる情報は確かに膨大だ。その中から必要とされるであろう一つだけを選りすぐることな

ど出来はしない。ただ、今起きている事象の全てを俯瞰することで、すべきことを見いだせることもある。ただ、それだけなのだ。そして、今為さねばならないことは……。

クリスは大きく一つ溜息を吐くと、目を開いて世界樹を見上げた。どこまでも大きくすべての方向に根を張り、枝を張っている。どこまでもまっすぐで一つでしかない。どこまでも続きどこへも行かない。総てであり無である。無であり総てである。全き一つの形を持たないその樹を。そして、目を閉じて樹に手を触れた。

連載第３回（最終回）

TOY

― 森のクマさん（三） ―
（最終回）

by K.Shimokoshi

ＴＯＹとＪＯＥは、クルマのドアを勢いよく開けて外へ出た。高野未来のマンション前のことである。大変なことになったとＴＯＹは舌打ちした。

　ほんの数分前、高野からＴＯＹの携帯に電話があった。自分のマンションの寝室に、缶詰のような見なれない缶が置いてある、とのことだった。そして、その直後、電話口から高野の悲鳴が聞こえてきた。その缶から火が噴き出てきたというのだ。

　・・・チッ、先にアクションを起こしやがった。まあいい、奴を追い詰めるネタは揃ってる・・・

　ＴＯＹはすぐにクルマのエンジンをかけて走りだし、高野のマンション前に来たのだった。

　エレベーターホールに来ると「上」を示すボタンを押す。ドアはすぐに開いた。高野の部屋の階で扉が開き、それと同時にＪＯＥが勢いよく飛び出した。しかし、勇んで出たはいいが、扉の前にはハードルのような障害物が置

いてあり、それに足をとられＪＯＥは派手に転んだ。
「うっぎゃっぎゃっ。い、痛いっす、痛いっす、一体、何々すか、こんなところに物置いたりして」
「邪魔だ、どけっ」
ＴＯＹはそう言いながらも、思い切りＪＯＥを踏み付けて先に進んで行った。
「ウッッゲーッ、ひ、ひどいっすＴＯＹさんっ」
ＪＯＥは立ち上がるとその障害物を元に戻した。
「ＪＯＥッ、んなもんどうでもいいっ、早くしろっ」
走りながら後ろを向いてＪＯＥに言った。
「え、あ、そうっす。それどころじゃないっすっ」
高野の部屋の前まで来るとドアノブを捻った。鍵がかかっている。ＴＯＹはポケットから鍵を取り出した。そ

れは、万一のためにと高野から預かっておいたものだ。まだ預かって間もない。ＴＯＹも、まさかこんなに早く使うことになるとは思っていなかった。鍵を開けると、今度はドアチェーンが行く手を阻んだ。外からは外せない構造になっていた。ＴＯＹは舌打ちすると、体当たりを何回か繰り返しチェーンを壊した。
二人が中に入ると、辺りは煙りが蔓延していた。よく見えないが、薄らと奥の部屋から火が出ているのが見えた。おそらくそこが寝室だ。
「ＪＯＥっ、消防車呼べっ、救急車もっ」
「はい、了解っす」
ＪＯＥは外へ出ると携帯をかけた。
マンション中に警報が鳴り響く。火災報知機が作動し

たようだ。ＴＯＹは口をハンカチで押さえ、寝室の方へと進むと、寝室の前で倒れている高野の姿を確認した。ＴＯＹは近寄ると彼女を抱え起こした。煙を吸い込んで気を失っているようだった。火の方は、もう、どのように消したら良いか、というレベルを超していた。ＴＯＹは高野を抱え上げると玄関を出た。あたりは警報のため俄かに慌ただしくなっている。両隣の住人が驚いた様子で手に物取って逃げていくのが見えた。

　ＴＯＹが高野の頬を叩くと彼女は意識を取り戻した。しかし、意識が朦朧としているようで、すぐには状況を把握できないようだった。

「おい、大丈夫か」

「・・・ＴＯＹ」高野は、そうぼんやりとつぶやき、

次に気付いたように部屋の中へ戻ろうとした。「あ、だめ、・・・だめ、・・・燃えちゃう」
「やめろ、もうだめだ、あきらめろ」ＴＯＹが高野を抑えて避難しようとすると、彼女は必死でそれを振り切ろうとした。「だから、あきらめ・・・」
そこで、高野が発した言葉にＴＯＹは反応した。
「・・・人形が・・・燃える・・・」
『人形』って、・・・例のバアさんの形見っていう、浄瑠璃の人形のことか」
高野はＴＯＹの方を向くと黙って頷いた。
ＴＯＹは、中の火の回り具合を見てみる。火の勢いは強いが、今ならまだいけるかもしれない。
「チッ」舌打ちをする。高野に「あるのはどの部屋だ」

と場所を聞き出し、そして、ＪＯＥに向かい「彼女を連れて避難してろ」
「ＴＯＹさん、あぶないっす、無茶っす、やめた方がいいっす」
「うるせぇ、さっさと行け、蹴るぞ」
そう言いながらＪＯＥを蹴飛ばした。
「のわぁ、って、もう、蹴ってる蹴ってる」
ＪＯＥはＴＯＹの方を心配そうに見ながら、高野を連れその場をあとにした。ＴＯＹは隣の家にあがり込むとバスルームを見付け、そこで全身を濡らしてから高野の部屋に突入した。
ＪＯＥは高野の足どりが不安定であったため、エレベ

ータを使うつもりでいた。非常階段はそれよりも遠くにある。しかし、エレベータホールまで来るとＪＯＥは首を傾げた。エレベータの前に、ハードルのようなものが置かれてあり、それには「点検中」の貼り紙がされていたのだ。そう、それは、この階に到着したときにＪＯＥがつまずいたものだ。エレベータは使えていた筈だ。何か解せない。しかし、万一があってはいけない。ＪＯＥは仕方なく非常階段を使うことにした。階段へ出ると、何組かの家族連れが降りていくところだった。高野がフラついているので、その一行が通り過ぎるのを待って降りはじめた。何段か降りた所で上から人がかけ降りてくる音が聞こえ、ＪＯＥは立ち止まって振り返ってみた。

そこにいる人物を見てＪＯＥは固まった。

「お、お前は・・・」
その人物は鉄パイプを持っており、今まさにＪＯＥに向かってそれを振り降ろそうとしているところだった。ＪＯＥは危険を感じたが、時既に遅く、それで思い切り殴られてしまった。ＪＯＥは一瞬呻き声を出したが、そのあとは痛みで声をあげることもままならず、高野と共にその場に倒れた。ＪＯＥを殴った人物は高野を抱え上げると階段を上がり始めた。ＪＯＥはそれを見ていたが、何もできないまま意識が遠退いていった。
ＴＯＹは浄瑠璃人形を抱え、エレベータホールで考えていた。明らかに使えていたエレベータ。よく見てみると、エレベータが今何階にいるのかを示す表示のところ

にガムテープが貼られていた。これでは動いているかどうかわからない。エレベータが使えないように見せる工作がされているとしか思えない。
・・・もし、これが多田の仕業だとすれば、・・・だとすれば、非常階段で待ち伏せ・・・
ＴＯＹは急いで非常階段へと向かう。階段に出ると、踊り場の所で倒れているＪＯＥの姿が目に飛び込んできた。ＴＯＹは慌ててＪＯＥを起こし体を揺すった。
「おい、ＪＯＥ、大丈夫かっ、ＪＯＥっ」ＪＯＥはすぐに気が付いた。「どうした、多田にやられたのか」
「・・・うー、そうっす、いきなり殴られたっす」
「高野はどうした、多田が連れてったのか」
「そうっす、上へ連れて行かれたっす」

『上』、・・・屋上か。・・・行くぞＪＯＥ、立て立つんだＪＯＥっ、もたもたすんなっ」
「りょ、了解っす。・・・了解っす・・・が、目ん玉グルグルっす、や、やばいっす」
「高野にもしものことがあったら、焼肉は無しだぜ」
「う、そ、それはダメっす。頑張るっす」
ＪＯＥは立ち上ると、ＴＯＹと一緒に階段を駆け上がり始めた。

多田は高野を抱えて屋上を歩いていた。下の方では消防車が到着しており騒がしくなっている。
高野はもがいて降りようとしているが、多田の力が勝るということと、まだ力が思うように入らない、という

状態のため、ままならなかった。
「ちょっと、どういうつもりなのよ」と高野。
多田は無害そうな顔を装って言う。
「大丈夫ですか、安心して下さい。私は怪しい者ではありません。さっき一緒にいた男こそ危険なやつですよ。ここなら心配いりません」
「何言ってんのよ、あんた多田でしょ、あたしにいやがらせしてるのはあんたじゃない、知ってんのよ、『危険』なのはあんたでしょ」
多田は屋上の真中あたりに来ると顔を無表情にした。
「なぁーんだ、知ってたのか」
そう言って高野を放り投げるように下に降ろした。高野はしたたかに体を打ち、痛みが体を走った。高野は立

上り逃げようとするが体が思うように動かない。高野はポケットに入れてあるＴＯＹから預かっているものを取り出そうとしたが、先に多田に腕を取られてしまった。
「何、何なのよ、一体、何が目的なわけ、どんな理由があって、あたしにこんなことするの」
多田は、ニタァっと薄気味悪くわらう。高野が恐怖に脅えている様子を楽しんでいるようだ。
「なあ、『森のクマさん』を知ってるか」
「な、なに言ってるの」
高野は強く腕を振って多田の手を振りほどいた。その拍子に転んでしまったが、そのまま、四つん這いで多田から離れようとした。多田はそのあとをゆっくりと追う。
「知らないかなぁ、『ある～日、森の中・・・』って曲

だよう、知ってるだろう」高野は何も答えず逃げ続ける。
「何か言えよう」多田はそう言って高野の襟をつかんだ。
「た、助けて」
「クマさんはさぁ『お逃げなさい』って言ったんだよ、何のためにそう言ったんだと思う。クマさんは、落とし物を拾って持ってきてくれるくらい親切なんだよう」多田はポケットから例のナイフを取り出した。「きっと追い掛けるのが好きなんだよ、楽しいんだよ。曲の続きはきっとこうだ。落とし物を拾って仲良くなったふりをして、心を許したところを襲うんだ」
多田は高野にナイフを刺そうとする。
そこで背後からストップをかける声が聞こえてきた。
「ちょっと待ったァッ、クマは追い掛けるのが好き・・・

だって、・・・何わけわかんねぇこと言ってやがるっ。それ以上そいつに指一本でも触れてみろっ、こいつでテメェの脳天ブチ抜くぞっ」

多田は振り返った。そこには二人の男が立っていた。一人は拳銃らしきものを持って構えている。もう一人はさっき階段で叩きのめした奴だった。

「何々だ、誰だ、キサマら」

『助け屋』だ、覚えとけ、このクマやろうっ」そして、高野に「またせたな」

「ちょっと遅いじゃない、早く何とかしてっ」

ＴＯＹは拳銃らしきものを構えたまま、素早く多田のそばに寄り、多田の頭に銃口を突き付けた。多田のナイ

フを持った手がＴＯＹを襲おうとしたが、それがＴＯＹの体に到達する前にそれを蹴りあげていた。ナイフは空を飛び、離れたところにカラカラっという音をたて転がった。

「くうっ、ＴＯＹさんっ、カッコいいっす、カッコいいっす、ほれぼれするっす」

その言葉にＴＯＹはＪＯＥの方へ振り返った。

「カカカッ、そうだろ、そうだろ、もっと褒めろ」しかし、そのすきに多田はＴＯＹを突き飛ばした。「おわっ」ＴＯＹは勢いよく転がり、拳銃もその拍子にＴＯＹの手を離れて転がった。

ＪＯＥは呆れて目を細める。

「はぁっ、ＴＯＹさーん、カッコわるぅー」

その直後、高野の方から悲鳴が聞こえてきた。
「キャーッ、ＴＯＹ、あぶないっ」
多田が拳銃を拾いあげ、ＴＯＹに銃口を向けたのだ。
『助け屋』だが『棹竹屋』だが、マヌケな野郎だ」
ＴＯＹは、嘲るような笑みを浮かべた。
「テメェに引き金引けるのか、弱虫で意気地無しのテメェに、引き金なんてものが引けんのかよ。・・・なあ、タダァベアさんよ、なぁ、弱虫のタダァベアさんよ、引けるもんなら引いてみな」
多田はそう呼ばれ、ひどくうろたえた。
「ななな、何で知ってんだ、そのあだ名で俺を呼ぶなっ、・・・俺が引けないと思ってるのか。引けないと思ってるのか。思ってるんだな。ばかにしやがって、ばかに

しゃがって、生憎だな、ぜーんぜん、平気さ、そうさへーきさ、自分の鉛玉でも食いやがれっ」
多田は引き金を引き、それと同時に激しい破裂音が辺りに響き渡った。
呻き声が聞こえる。
しかし、その声の主はＴＯＹではなく、多田だった。
ＴＯＹはニヤッと笑った。
「バーカ、引くと思ってたさ、そりゃオモチャだ」
拳銃と思われてたそれの後部・・・つまり、銃口と反対側の撃鉄の部分から、多田めがけて閃光が走ったのだ。
目を覆う多田。ＴＯＹは立ち上ると、多田めがけて回し蹴りをくらわした。多田は再び呻き声を上げる。が、倒れはしなかった。よろけながらも高野のいる方へと向か

う。彼女を人質にとりたいらしい。しかし、そばに来た時だった。高野はポケットに入っているＴＯＹからの預かり物を取り出した。それはガス銃だった。高野はそれを多田の鼻めがけて引き金を引く。銃口から煙りが吹き出し、それが多田の鼻を直撃した。三度、多田から叫ぶような呻き声が聞こえてきた。多田はその場に転び、もんどりうった。ＴＯＹはそばに寄ると多田の腹を蹴りつける。

「へんっ、どうだよ、イテェかよ。タダァベアさんよ。こそこそと人を襲ったりして、どういうつもりなんだよ、ぇえっ、わかってんのかよ。人間はな、蹴られりゃイテェし、焼かれたってイテェし、ナイフで刺されたってイテェんだよ。お前が刺して殺した女もイテェ思いしなが

ら死んだんだよっ、わかってんのか」
多田は、更にうろたえた様子で震えだした。
「お、お、お前、ど、どうして、・・・お前、何を知ってんだ。・・・お前、何者なんだ」
「だから『助け屋』だって言ってんだろ、一回で覚えろっ、このタコッ・・・イヤッ、クマッ」そう言ってもう一発、腹を蹴った。多田の顔が苦痛に歪む。「テメェのことなら何だって知ってるさ。・・・会社のコンピュータのパスワードがｍａｒｄｅｒだってことも、テメェが、最近おこってるＯＬ連続殺人の犯人だってことも、・・・その現場写真を撮って会社のコンピュータにしまってることもな」ＴＯＹは、その写真のプリントアウトしたもの数点を多田の前にバラまいた。多田はそれを見て顔を

あおくした。慌ててそれらをかき集める。ＴＯＹはそれに追い討ちをかけるように続けた。「高野の部屋に忍び込んで盗聴器を仕掛けたこともな。どうやって忍び込んだかってことも知ってるぜ」

　ＴＯＹはＪＯＥの方に一瞬視線を移した。

　ＪＯＥが後を続ける。

「あんた、未来さんの元カレに接触してるっすね」ＪＯＥは高野の方に視線を移す。「未来さんの元カレも同じ研究室の出身っすね。・・・未来さんには悪いっすけど、とんでもない奴だったようっす。ルックスは良かったようっすけど、付き合ったことのある女の鍵、幾つも持ってたようっす。勝手に合鍵作ってたようっす。自慢してたようっす」

高野は驚いた。

「え、ちょ、ちょっと、どういうこと。あいつ、勝手にあたしの鍵を持ち出して合鍵作ってたってこと」ＪＯＥはコックンと頷いた。高野は呆れ顔を見せる。「ひどいやつだとは思ってたけど、そこまでひどいとは知らなかったわ」高野は多田を指差す「こいつとあまり変わんない変質者じゃない。・・・でも、ＪＯＥ、あなた、どうして過去形で言うの」

「行方不明なんす。・・・多田が接触してから」

ＴＯＹは多田の顔を踏み付ける。

「こいつがやりそうなことは想像がつく。バラして捨てたに決まってる。なぁ、そうだろ」多田は答えなかった。ＴＯＹは再び多田の腹を蹴る。「どうなんだ、えっ、

訊いてんだよ答えろ、じゃなきゃ、死ぬまで腹ぁ蹴るぜ。テメェのナイフで指を一本一本切り落としてやるのも面白れェ。テメェなんか、誰にも気付かれず始末するなんざ、簡単なんだよ」

多田は両手で耳をふさぐと、ガタガタ震えながら大きく喚きだした。

「ワーッ、アーッ、アーッ、あいつ、あいつ、あいつ、バカにしたんだ、バカにしたんだ、あいつが悪いんだ。あいつが、あいつが、悪いんだ。女にもてるからって自慢しやがって、自慢しやがって、俺をバカにしやがって、バカにしやがって、気色悪いだとか、クズだとか、頭の中カラッポのくせに。・・・ああ、あんな奴殺してやったさ、ナイフで何回も何回も」多田は、恐怖に脅えながら

命乞いした相手の顔を思い出し、薄ら笑いを浮かべた。両手でナイフを持つ格好をし、何度も刺すフリをして見せた。「みんなみんな殺してやるんだ、殺してやる。いつもいつもそうだ、みんな俺を見りゃ避けやがって、バカにしやがって、とろいだの、鈍いだの、汚いだのと、俺が何したって言う。仕事のできねぇ奴とか、暇な奴だとか、好き勝手言いやがって。・・・いつもいつも一人ぼっちだ。子供ん頃からずっと一人ぼっちだ。お前らに俺の何がわかる。・・・その女だってそうだ」多田は高野を指差した。「俺を見ただけで、よけやがって、バカにした目をしやがって」

　高野は驚いて反論する。

「ちょ、ちょっと待ってよ、知らないわよ、『よけた』

とか『バカにした目』とか、何のこと言ってるの、そんな覚え全然ないわよ」
「しらばっくれるなっ、あそこにいた全部がそういう目で見てやがった、見てやがったんだ。だから、みんな殺してやるんだ。研究室の奴も、会社の奴も、みんなみんな」ＴＯＹの方を向く「お前もだ」
ＴＯＹは呆れ顔を見せる。
「何が『お前も』だっ、笑わせるな。テメェ、被害妄想もいいところじゃねえか。そんな理由で、三人も人を殺したのか」ＴＯＹは拳を作ると多田の顔を殴った。続けざまに何回も何回も殴った。「人を殺しやがって、オモチャみてぇに何人も何人も殺しやがって、人間はオモチャじゃねェッ、オモチャを壊すのとはわけがちがうんだ、

わかってんのかっ。人間をオモチャみてぇに殺す奴は人間じゃねぇ、俺がぶっ壊してやる、ぶっ壊してやる、分解してバラバラにしてやる」ＴＯＹは多田のムナグラを掴んで引き寄せた。多田はＴＯＹと目を合わせない。「テメェ、子供の頃に母親が死んだそうだな、今、一人ぼっちだったって言ったな。テメェが殺した奴がどんな奴か知ってんのか。・・・俺は知ってるぜ。テメェが最初に殺した奴は、育児休暇から復帰したばかりだったんだ。わかるか、子供はテメェとおんなじになっちまったんだ」多田はＴＯＹの方に顔を向けた。「二人目の奴がどんな奴か知ってるか。もうじき結婚する予定だったんだ。一人娘だったんだ。相手の男も両親も大事な人を失っちまったんだよ。大事な人を失った時にできる心の空洞をテメ

ェは知ってんじゃねぇのか。高野も同じだって言ったな。テメェは高野の何を見てたんだ。こいつは両親がイネェんだ。バアさんに育てられた。そのバアさんだって今はイネェ。『二人』ってもんを知ってんだよ。それを、それを勝手な想像で決めつけやがって。人間はな、十年生きりゃ十年の過去がある。二十年、三十年生きりゃそれなりの重さのものを背負ってんだよ。過去の無ェ、オモチャとは違うんだよ」

ムナグラをつかんだまま殴りつけた。繰り返し殴りつけた。更に殴りつける。ＪＯＥが心配して声をかける。

「ＴＯＹさん、や、やり過ぎっす、もう、充分っす。死んじまうっす」しかし、聞こえてないのか、ＴＯＹは全く反応しなかった。ＪＯＥは、不安気にその様子を見

ている高野に視線を移した。高野はそれに気付きＪＯＥの方を向いた。ＪＯＥは肩を竦めてポツリ「イッちゃってるっす」と言った。

『イッちゃってる』って、止められないの」

「ムリッす。ＴＯＹさんは、こうなったらもう成り行きにまかせるしかないっす。あとは運を天にまかせるしかないっす」そう言って手を合わせ「南無・・・」

「ちょ、ちょっと・・・、まじ・・・」

やがて多田は口の中を切って血を噴き出した。ＴＯＹは多田の血を見て殴るのをやめた。「なんだよ、一丁前に血を流しやがって、赤い血ィ流しやがって。・・・なんでテメェなんかの血がアケェんだよ、テメェの血がアケェわけネェんだ、人間みテェなもの流しやがって、ふざけ

やがって、何かの間違いに決まってる、吐くなら青い血か黒い血を吐けってんだ」
　ＪＯＥは目を細める。
「・・・ＴＯＹさん、そりゃムリッす」
　ＴＯＹは再び拳を振り上げたが、殴らずそのまま下に降ろした。
「イテェかよ、だがな、テメェが殺したやつはもっとイテェ思いしながら死んでったんだ。・・・テメェの命はその血に免じて助けてやる。・・・だがな、俺たちが調べたことは全て警察に流す。テメェが今言ったことは全部録音してる。テメェが言ったところは全部警察に流す。・・・テメェには、これから何度でも殺したやつのことを教えてやる。テメェが耳傾けるまで教え続けてやる。テメェは一生ムショで後悔してろっ」

ＴＯＹはゆっくりと多田から離れた。多田はボーっと寝転がったままだったが、そのうち声を出さずに泣き始めた。しばらく泣いたあと、多田はブツブツと言いながら立ち上った。それからフラフラとよろけながらナイフの落ちているところまで行き、それを拾い上げると、今度は高野のいる方へと歩き出した。

「・・・クマはな、・・・クマはな、いつもいつも一人ぼっちだったんだ。いつもいつも寂しかったんだ。お前に、お前なんかにわかるかよ。本当にわかるのか、わかるもんか。何も悪いことしてないのに、みんなみんな避けていきやがって。だれもクマの言うことなんか聞いてくれないんだ。だから、ある日思ったんだ。みんなみんな殺してやるって。親切なふりをして、近付き、・・・最

後は襲うんだ」
急に走り出し、ナイフを振り上げた。
ＴＯＹは呆れながら舌打ちした。
「チッ、懲りない奴だ」ＴＯＹは走って多田を追い掛けた。「わけのわかんねぇこと言いやがって、クマはな、・・・クマはな」多田の真後ろまで来ると回し蹴りの態勢に入った。「ただのバカ正直者だったんだよっ」ＴＯＹの足が多田の頭にヒットした。多田は呻き声を上げて倒れ、気を失った。「わかったか、蹴るぞこのやろう」
「ＴＯＹさん、もう蹴ってる、蹴ってる」
翌日、何者かの情報で多田は逮捕された。この「何者」とはもちろんＴＯＹたちのことである。警察はＴＯＹた

ちの行方を探したが、高野が「知らぬ存ぜぬ」で通したため、見付け出すことはできなかった。
結局、今回の事件は、小さい頃からバカにされ続けていたことに加え、最近、仕事がうまくいってなかったため、多田の中にあった被害妄想が膨らんでしまったのが原因らしい。
数週間が過ぎ、この事件の話題が下火になった頃、高野未来はＴＯＹたちの所を訪れた。相変わらず、どこぞの公園の駐車場でヤキソバを作っている。
高野の表情は、元気が無いように見えた。
「何しに来たんだ」とＴＯＹ。
「・・・ええ、お金のことよ」
「金は萬屋に渡せ」

「そうなんだけど、・・・お金がないのよ」高野は一つ溜め息をついた。「あいつに部屋を燃やされちゃったでしょ。・・・色々お金が必要になったんで、すぐに全額は払えないわ。萬屋さんにそれを話したら、ＴＯＹと交渉してくれ、ってなったのよ。それで来たわけ」

「んな、知るか、こっちも生活がかかってんだ、借金してでも払え」

「そんな、お願いよ。・・・今度の件で仕事場も居ずらくなって、今、職無しなのよ。・・・『助け屋』さんなんでしょ、何とかしてよ。金額だってメチャクチャ高いし、だいたい、あなたたちがモタモタしてるからこうなったようなものじゃない。あたしの方がお金を貰いたいくらいだわ」

「う、そりゃないっす、勘弁してほしいっす。・・・ＴＯＹさん、待ってあげましょうよ」

ＴＯＹは、頭を掻いた。

「命を助けてもらっといて、ずうずうしいな」ＴＯＹは舌打ちする。「わーったよ、待つよ」高野とＪＯＥは手を叩いて喜んだ。「そのかわり、ＪＯＥ、焼肉はお預けだぜ」

それを聞くと、ＪＯＥの顔は急に凍りついた。

「なな、なンですとーっ、未来さん、やっぱり、ダメッす、ダメッす、今すぐ払ってほしいっすっっっ」

「じゃ、それはそういうことで、・・・で、ねぇ、ＴＯＹ、相談があるんだけど」

「ダーッ、聞いてないしっ」とＪＯＥ。

「何だ、『相談』って」
「ダーッ、ＴＯＹさんまで聞いてないしっ」
「つまり、その、今、プーなわけよ」
「ダーッ、普通に会話続けてるしっ」
「だから」
「あたしを雇ってくれないかしら」
ＴＯＹはそれを聞いて笑い出した。
「何だ、冗談きついぜ、ムリムリ、あんたにゃムリだ。ヤベー仕事だってわかったろ」
「やばいところはあたしも嫌よ。・・・でも、女がいると都合のいいことだってあると思うし。・・・例えば女しか入れない場所の調査なんて、やりやすくなると思うでしょ。・・・それに、ベラボウに高額なお金取るんだから、

支払いも早くできると思うし」そこまで言うと、高野はＪＯＥの方に向き直った。「仲間にしてくれたら焼肉奢るわ。・・・それくらい払うお金はあるから」
「オーッ、それは大々名案す。そうしましょう、そうしましょうっす。決まりっす、ケッテーっす」
「おーい、勝手に決めんじゃねぇ。・・・人が増えたら分け前だって減るんだぜ」
「将来の焼肉より、今の焼肉っすっっ」
「おいおい、おメェの頭にゃそれしかねぇのか」しかし、二人はそれに構わず手を取り合って喜び始めた。「聞いちゃいねぇし」
「あ、でも、未来さん、ＴＯＹさんと一緒だと、普段は、ヤキソバばっかっすよ」

「・・・え、まさか、毎日ヤキソバ食べてるわけ」
ＪＯＥは首を横に振った。
『毎日』じゃないっす、『毎食』っす」
「・・・ゲッ、まじ」
高野は顔を引き攣らせた。
「おい、ＪＯＥ、そんなにヤキソバ嫌いか」
「ていうか、毎食毎食、食ってたら誰だって嫌っす」
ＴＯＹはゆっくり片方の靴を脱ぐと、その足でＪＯＥの顔を蹴った。ＪＯＥは「オワッ」と言って仰向けにひっくり返る。
「蹴るぞ」
「って、もう蹴ってるっす。痛いっす。痛いっす。メガひどいっす。・・・おまけにギガ臭いし」

ＴＯＹは今度は拳でＪＯＥの顔を殴りながら言った。

「・・・ほっとけ」

↓了

「ＴＯＹ」は今回をもって一旦終了します。

続編の構想はあるので、次回からでも書きたいところなのですが、他にも書いてみたいものもあるし…、正直、いつになるかはわかりません。

それでも、いつか、再びお会いできる日を夢見て…、

それでは、また…

編集後記

　ワールドカップも始まり、街がにぎにぎしいです。（「サッカーファンでもないんだから、お祭り騒ぎしてないで、原稿書け〜！」）でも、家へ帰ってテレビ見ている人が多いので、人気はあるんだかないんだか…。（「帰って原稿書けよ！」）
今年はどうやら、厄年らしい。
１月早々足の小指の骨にヒビ入るし、春先に出来た鳥のお灸は１ヶ月も治らないし、手首から肘が痛いし……。
（「単に運動神経ないのと、年なんじゃないの？」）
編集でお茶の水に行ったら、檸檬の喫茶コーナーがなくなっていて、ちょっとショック！キッシュ好きだったの

に……。（「食ってないで、原稿書け～！」）

（紅）

いや～、ついに日本でのワールドカップも開幕しました!! ガンバレニッポン～！ てなわけで（どーゆーわけじゃ）rififi51号もついに発刊になったし。おかしいなぁ… rififiって季刊誌じゃなかったけ？ なんてことは忘れてください。年2回刊行（あくまで予定…というより希望的観測!?）の実現を目指して日々精進して参るです。 （↑なんかどことなく消極的なのはなぜ？）

（翼）

住み慣れた大阪を後にし、１２年ぶりに関東に復活した。
以前住んでいたこともあるのだからそこまで違和感があるわけじゃないのだが・・・
まままま漫才の番組がなあああーーーい！！！
駄目だあ、もう禁断症状がっ・・・漫才見せろ！！　愛するシャンプーハットや麒麟やメッセンジャーや中川家やアメザリやFUJIWARAや１０＄やもっともっといーっぱい見たい見たい見たいよう！！
大嫌いだったロザンやキングコングがちらっとテレビに出ただけでも懐かしさで許してしまう。このままでは漫才好きとして堕落してしまう。あうあうあう。
誰か在関西の方、私に漫才番組をビデオに録ってくれ

ええ（マジ涙）

これ本音。ぢゃっ。

（猫）

EOF